

■プーランク/2台のピアノのための協奏曲二短調 FP.61

曲が始まったとたん、ピアノのエキゾチックな楽想が耳を捉える。プーランクが1932年に作曲した2台のピアノのための協奏曲は記憶に残るメロディが豊富に散りばめられているが、その多くは既存の音楽に基づくパロディである。作曲家が好きな音楽を集めてきて遊んでいる、まるでおもちゃ箱のような作品。プーランク自身は「快活で素直」な性格の音楽だと表現している。

第1楽章冒頭のピアノは1931年に植民地博覧会で聴いたバリ島のガムラン音楽の響きを模倣したものだろう。曲全体にも時折、旋法が用いられている。快活できびきびとした第1主題、リズムックで軽やかな第2主題、そしてテンポの遅いピアノ2台によるエピソードを挟んで、複数の主題やモチーフを絡めた再現部となる。第2楽章はモーツァルトの八長調（K467）のピアノ協奏曲の緩徐楽章をモデルにしたラルゲット。最初の主題はあまりにモーツァルトらしく始まるが、ハーモニーの展開から近代の音楽だとわかる。少しテンポの速い中間部が置かれている。第3楽章は自作の〈田園詩曲〉のフレーズも引用されている。4つの主題が提示、展開されて、コーダとなる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。